

【上越市立東本町小学校の実践】

第5学年 同和学習指導案

1 主 題 新潟水俣病に対する差別解消に立ち上がる

2 ねらい

新潟水俣病の被害者が受けた差別に憤り、差別に立ち向かう生き方に共感することを通して、病気に対する偏見・差別を許さず、差別の解消のために真実を伝えようとする意欲を高めます。

3 学習を進めるにあたって

＜資料『命の川 阿賀野川』 『もうひとつの水俣病』は、「いっちゃんめい水らった」
「未来へ語りついで～新潟水俣病が教えてくれたもの」より一部抜粋＞

児童はこれまでに阿賀野川での現地学習会や新潟水俣病被害者との交流を通して、新潟水俣病の概要や発生前から現在までの人々の生き様を学ぶことができました。児童は生活に欠かせない大切な川が一転して魔の川となって人々の体をむしばんだことに憤りを感じたり、病気が人の心まで変えたことに気付いたりしました。

本学習は2時間扱いとし、第1時では新潟水俣病の発生前の人々の暮らしや、病気の原因と症状・被害・認定制度と裁判についてとらえます。第2時では、被害者への周囲の人々による偏見・差別を中心とし、訴訟や裁判を取り扱わずに人としての在り様を考えていきます。新潟水俣病の公式確認から44年経った今もまだ解決には至らず、未認定患者は、いわれのない偏見や差別によって苦しんでいます。新潟水俣病は決して過去のものではない、今あるこの差別を解消するために自分たちは何をすべきなのかを、今も差別に立ち向かっている方からのメッセージや現地での学習を想起して話し合い、新潟水俣病の真実を伝えていこうとする気持ちを高めていきます。

そこで、次のように展開を工夫して主題に迫っていきます。

第1時

- ・阿賀野川の美しさが実感できるように、写真や映像を提示したり、現地学習で見聞きしたきれいな阿賀野川を思い出させたりします。
- ・新潟水俣病によって失ったものは何かを、現地学習会での被害者からの話を想起させ、考えさせます。
- ・新潟水俣病被害者の苦しみだけでなく、裁判に立ち上がった強い心にふれます。

第2時

- ・新潟水俣病の苦しみを実感できるように、写真や被害者のメッセージを提示し、臨場感をもたせます。
- ・差別は人の心の弱さに起因していることを、事前調査での自分の言動を振り返りながら気付かせます。
- ・今も続く差別に対して自分にできることは何か、現地学習会での被害者の苦しみや力強さを思い起こし、行動しなくてはいけないという切実感をもって話し合い、発表させることで差別解消への意欲を高めます。

4 学習の展開（全2時間）

(1) 第1時の展開

学習内容	◎発問 ○予想される児童の反応	◇教師の支援
<p>「命の川」である理由</p> <p>阿賀野川に対する被害者の思い</p>	<p><資料の前半を読む></p> <p>◎現地学習会を思い出して、「阿賀野川が命の川」と言われる理由を発表しましょう。</p> <p>○澄んでいてとてもおいしい水・飲み水・生活用水・産湯</p> <p>○フナやコイなどの大切なたんぱく源</p> <p>○大切な仕事の場</p> <p>◎「命の川」をどう思っていたでしょう。</p> <p>○川と一緒に生きているようだ。</p> <p>○川は友達みたいだ。</p> <p>○近所との絆を深める場</p>	<p>◇新潟水俣病現地学習からきれいだった阿賀野川を思い起こさせる。</p> <p>◇総合的な学習での学びから、健康な体だけでなく、「命の川」でなくなってしまったことをとらえさせる。</p>
<p>水俣病によって失ったもの</p>	<p><資料の後半を読む></p> <p>◎水俣病によって失ったものは何でしょうか。</p> <p>○健康な体。漁師という仕事。生活のためのお金</p> <p>○きれいな水。遊び場。たくさんの魚。</p>	<p>◇板書で水俣病によって失ったものに×をつけていく。近所との絆にはふれない。</p>
<p>水俣病に対する思い</p>	<p>◎水俣病とわかって、「私」はどんな思いでしょうか。</p> <p>○魚を食べただけなのに、どうして病気にならなくてはいけないんだ。</p> <p>○このしびれた体は治るのか。治してほしい。</p>	<p>◇被害者の怒りや悲しみを考えさせる。</p>
<p>化学工場に対する憤り</p>	<p>◎メチル水銀を流した化学工場に対して、「私」はどんな思いでしょうか。</p> <p>○なぜ、化学工場は体に悪いメチル水銀を流したのか。</p> <p>○責任を認めないなら、裁判を起こして、たたかおう。</p> <p>○阿賀野川をもとのきれいな川に戻してほしい。</p> <p>○もとの健康な体に戻してほしい。</p> <p>◎水俣病は健康や仕事を奪ってしまいました。しかし、実はもうひとつの水俣病の側面があるのです。</p>	<p>◇化学工場について総合での学びを振り返りながら、被害者の気持ちを考えさせる。</p> <p>◇現地学習で交流した被害者を想起させ、裁判に立ち上がった強い心にふれる。</p> <p>◇次時『もうひとつの水俣病』につなげる。</p>

(2) 第2時の展開

学習内容	◎発問 ○予想される児童の反応	◇教師の支援
新潟水俣病の症状、病気に対する偏見や差別への憤り	◎現地学習で交流した被害者の言葉を想起し、病気の症状を振り返る。 ◎資料を読んで感じたことを発表しましょう。 ○同じ町に住んで知り合いなのに、「欲たかり」「のめしこき」「ミナがきた」と言うのはひどい。 ○病気で苦しいから医者治療してほしいのに、「また来たか」「お金がもらいたくて」なんて許せない。 ○見えるとか聞こえるとかを、外見だけで決め付けないでほしい。	◇新潟水俣病による体の痛みを思い起こさせる。 ◇同じ町に住む人や医者によって差別された心の苦しみを感ぜとらせる。
偏見や差別に対する被害者の思い	◎Aさんは、どんな思いだったでしょう。 ○病気で体は苦しい。でも周りの人からの差別はもっとつらい。生きていくのがつらい。 ○近所の人も医者もみんな差別する。まるで遠くに一人のように寂しい。 ○なぜ被害者を差別するのか。同じ住民なのに。	◇体の痛みだけでなく、差別や偏見による心の苦しみを受けた被害者の気持ちに共感させる。
差別を引き起こす弱い心	◎なぜ人は差別するのでしょうか。 ○伝染病やたたりとか何かのせいにしてしまう心の弱さ。 ○真実を知らないで、周りに流される。強いねたみ心。	◇差別心の根源を自分の経験から考えさせる。
偏見や差別を許さず、真実を伝える決意	◎Aさんの力強いメッセージから、自分・自分たちは何をすべきかを考えましょう。 ○差別や偏見をなくすために、新潟水俣病の真実を多くの人に正しく伝える。 ○新潟水俣病は伝染病でもたたりでもないことを、強い勇気をもって伝える。 ○苦しんでいる人の周りの人が差別している現状、人の心の痛みに気付いて欲しいと伝えたい。	◇Aさんや現地学習会で交流した被害者の苦しみと力強さから考えさせる。 ◇新潟水俣病の真実とは何かを考えさせる。 ☆話し合いから差別や偏見解消のために真実を伝えようとする意欲を高める。

<第1時資料>

命の川 阿賀野川

前半

「今日も川で遊ぼうよ。」

夏になると、近所の仲間と一緒に阿賀野川の浅瀬を泳いで、時間のたつのを忘れる日々でした。魚とりをしたり水切りをしたりして、毎日のように遊んで過ごしました。いつも阿賀野川と私たちはいっしょでした。

川の水は冷たく澄んでいて、夜明け前の水は「いっちうんめい水。」と言われ、飲み水などの生活用水はもちろんのこと、赤ちゃんの産湯（うぶゆ）やなくなった人の末期の水（まつごの水＝死ぬ直前に口に含ませる水）にも使われていました。水だけでなく、川でとれるフナやサケ・ヤツメなどの魚は、肉などのない時代でしたから、大切なたんぱく源として毎日の食卓に上がっていました。さしみに焼き魚、煮魚など魚料理が大好きでした。松浜の人たちにとって、阿賀野川は、命の川だったのです。

父は漁師でした。父のとってくる魚は大きくて、とってもおいしかったのです。多くとれたときは親類や近所におすそ分けをしたり、近所からお返しに野菜をもらったりすることもありました。

後半

ところが、1965年ごろから、父は手足がひどくしびれ、耳鳴りやめまいがするようになって、仕事が思うようにできなくなりました。船に乗ると、ふらついてバランスを失ってしまうのです。毎日、共に過ごしてきた川に行けないだけでなく、生活さえもができなくなっていました。さらに、母にも同じ症状が出てきたのです。母の目は見えにくくなり、つまずいて転ぶことが増えました。

何度も病院に通い、ようやく父や母を苦しめている病気が何であるかが分かりました。それは、水俣病だったのです。

<第2時資料>

もうひとつの水俣病

「たたりで、死ぬんだ。」

「魚、いっぺ取り過ぎた 魚のたたりだ。」

「うつる、うつる、近づくな。」

手足がしびれ、耳鳴りがし、頭がガンガンする。よく見えない、聞こえない、体じゅうぼろぼろ。不安のどん底の中。

仕事を休めば、

「のめしこき（なまけ者）」。

検査のために病院に行けば、

「また、水俣のお金もらわれるから、検査に行った。」

医者には、

「見えるだろう、見えるはずだ。聞こえるだろう、聞こえるはずだ。」

「あんた、そんなに水俣病になりたいのか。」

「また、来たか。」

「お金がもらいたくて、子どもまでつれてきたのか。」

と、言われ、

水俣病患者として認められると、

「おまえ、水俣病になってカネいっぱいもらったろう。」

「あのしょ、食うに困らんのに、欲たかり（欲ばり）。」

「水俣病の家からは、嫁はもらわん。」

「水俣病の家には、嫁はやらん。孫の代までたたられる。」

「おい、水俣がきたぜ、ミナだ、ミナだ。」

と、さげすまれる。

優しい夫が酒におぼれ暴れる、地獄のような毎日。

水俣病が夫を変えてしまったのか。

差別した人も同じ町の人、差別された人も同じ町の人。

同じ人間で、同じ場所で生まれ育ってきたのに、

なぜ、人は少し違う、少し環境が変わっただけで、簡単に差別してしまうのか。

被害者からのみなさんへメッセージ 「強い勇気」

水俣病発生から 44 年たった今でも、水俣病被害者に対する周囲による偏見・差別はなくならない。

私は、人に何を言われても体は水俣病におかされても、心は強くもち、一人でも多くの人に、水俣病の真実を伝えたい。

一人でも多くの人から理解してもらえば、水俣病に対する偏見・差別はなくせるはず。

強くなり自分に自信をもつこと 歯をくいしばり真実を伝えることで、後でよかったと思える。

同じ苦しみを繰り返さないように、みなさんも、一歩前に出て行動してほしい。

引用・参考資料

新潟水俣病聞き書き集制作委員会「いっち うんめい 水らった」第2版 2006 より抜粋
新潟県「未来へ語りついで ～新潟水俣病が教えてくれたもの～」2002 より抜粋